●　猪９　猪の跡　●＝＝＝⇒猪・鹿・狸より

狩人の話では、猪は夏から秋の初めにかけて、カリに着くと言う。カリは峯近い萱場（かやんば）ボロー（藪叢・ぼろう）などの、やや平坦な地を選んで、猪が作った寝床であった。地面を長方形に穿って、その中にはゴ（落葉）や枯草を敷き、上にはやや丈の長い萱の類を橋渡しに覆ってあった。出入りは一方の端からするとも言うた。カリはまた山の中腹にもあったが、窪中などの湿地は避けたのである。虻や蚊の襲来を防ぐためと言うたが、子もまたそこで育てたので、生まれて間もない子猪が、カリの近くに斃れていることがあるという。まだ、肌に毛を生じない時、蚊に刺殺されるのだと言う。

萱場は文字通り萱立場で、六尺以上にも伸びた萱が密生して、足を踏み入れることもできぬような処が、自分の村などにもまだあった。栃の類が疎らに立っているくらいで、ほとんど他の植物は生える余地がなかった。間々虎杖（いたどり）が混ざっていたくらいのものである。ボローは山にはよくある人間の手のまだ及ばぬ一廓で、茱（ぐみ）、あけび、山葡萄（すえび）、その他名も判らぬ蔓科の植物が、互いに絡み合って、欝然と塚のようになっていた。日光も中へはろくろく通さぬほどであった。あきになるとそれらの実が一時に色づいて、鳥の群れなども集まった。自然の恵みの豊かな処で、狸などの穴も、そうしたボローの中が多かった。どちらも究竟な猪の隠れ場所であった。

ノタ（ぬた）を打った跡にも、狩人はまた注意を怠らなかった。猪がノタを打つのは窪合などの踏んでもすぐ水の湧く湿地で、グシャッタレと呼んだほど、水の多いじめじめした処であった。地形から言うと沢谷の奥の行詰まりであった。ある時村のネブツブの山で跡を見たことがある。子供の時で、判然記憶せぬが、何でも一ヵ所がひどくこね返して、田植の植代を掻いたようになって、上に澄んだ水が溜まっていたと思う。その通り聴いた話だったが、猪は体が熱（ほて）って熱って仕方がないので、ときおり来ては体を漬けると言う。

山の窪中には、猪がノタを打ちかけた跡と言うのがあった。両方から谷が迫った中の、わずかに径を通じた処などで、一寸進むことも出来ぬほどに踏み荒らして、足跡の一つ一つに水が溢れていた、まだ昨夜出たばかりだに、そこいらに猪がいるなどと言うた。足跡は蹄の先が尖ったものほど若猪で、円みが深いほど古猪と言う。

あるいはまた山のツルネ〔峰〕などの、平坦な草刈場を畑のように堀り返した跡

があった。蚯蚓や地虫を捜したのであるが、シャベルででもやったように、一塊ずつ土が穿ってあった。そうかと思うと、木の根を掘り石を分けて、自然薯（じねんじょ）を掘った。せっかく秋に目標の麦を播いておいたに、猪の奴に先を越されたなどと、自然薯堀りが口惜しがっていた。山の栗などもそうであった、猪の荒らした後には、ほとんど一つとして残ってはいなかった。悉く落葉を分けて探し出してしまう。ときたまあったと思えば、中の実だけがうまくえぐり取ってあった。昔は床下のゴットウ（地虫の類にて多くは蝉の幼虫）まで堀に来たと言う。朝起きて見たら背戸口にえらい穴が明けてあったなどと言うた。山沢に出て蟹をあさり、また蛇も食ったと言うから、何でもござれ喰われぬものなしの猪だったのである。